

◆和同開珎銅銭と伴出した土器

和同開珎の初鑄は和銅元年（708）とするのが通説である。平城京へ遷都する3年前のことで、藤原宮・京には初鑄後早くに埋没した和同銭が残された可能性がある。しかし、それと推定できるものは、これまでのところ、東一坊大路西側溝出土の和同開珎銀銭3枚のほかわずかで、条坊側溝出土の銅銭は2枚の富本銭だけである。

1995年1月に藤原京右京七条一坊西南坪から出土した一枚の和同開珎銅銭はその貴重な例である。和同銭は古銭研究者が「背広郭」「闊縁」と呼んで「古和同」とする特徴を持ち、その成分も、本年報50頁に報告したように西暦700年までに飛鳥池遺跡で鑄造された富本銭や、古銭研究者のいう「不隸開」古和同銭などと同じく、数%のアンチモンが含まれている。

場所は西南坪一町を占めた宅地の西北部につくられた池状遺構SX385とその北端に設けられた東西方向の排水路SD384の接点付近で、土器の他に鍛冶・鑄造・漆工関係遺物、漆塗り刀子柄などが伴出した。遺構には周辺にあった宅地内工房からの廃棄物が捨てられたとみられ、条坊施工期から藤原京廃絶後程ない頃までの遺物が含まれることになる（『藤原概報26』）。

伴出した土器には土師器蓋（1）、杯A（2～5）、杯C（6～8）、杯G（9～11）、杯H、大型碗B（12）、皿、高杯、鉢、甕、鍋（13）、カマド、須恵器杯A（18）、杯B蓋（19～21）、杯B（22～24）、蓋（14）、杯G（17）、碗B（15）、大皿、鉢、壺、短頸壺（16）、平瓶、甕などがある。これらには飛鳥Ⅳの標式資料であるSD1901A例に似たものと、飛鳥Ⅴの藤原宮東内濠SD2300例に似たものがあり、飛鳥Ⅳ～Ⅴにまた

がる内容を持つ。

器高が低くて外面の磨きが粗略な土師器杯A（5）や、径高指数19の杯C（8）など、飛鳥Ⅴでも新しい傾向とみえるものがあり、須恵器杯B蓋に20・21など内面のかえりのなくなったものが多いことが、より新しい段階のものが含まれていることを示すであろう。土師器大型碗B（12）は珍しい器種であるが、ほぼ同時期の総合工房である飛鳥池遺跡の土器に類例があり、高台部はそれで補った。鍋の多様な点、杯C、杯Gなどに漆が付着し、灯明の跡がみられることでも、この土器群は飛鳥池遺跡や藤原宮造営時の運河と目されるSD1901Aでの構成に類似している。富本銭と「古和同」銅銭との関係を明らかにするためにも、遺構の性格が共通する飛鳥池遺跡及びSD1901A出土土器等との比較によって飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器の再検討を急ぎたい。（西口壽生）

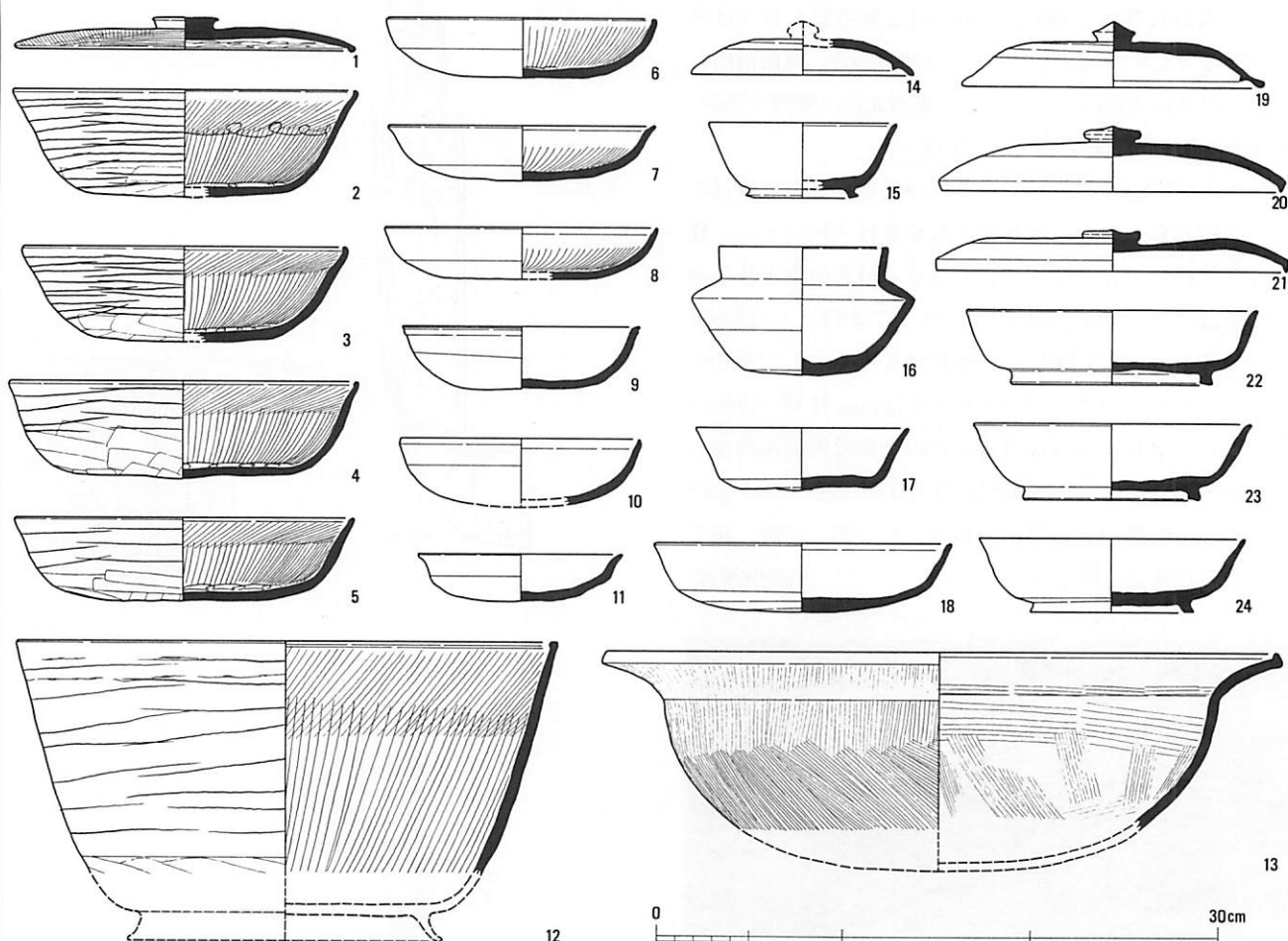


図11 藤原京右京七条一坊西南坪SD384・SX385出土土器 1:4